

「茶の湯と礼儀作法」

国立民族学博物館名誉教授、静岡文化芸術大学学長 熊倉 功夫

第10回嗜好品文化フォーラム「嗜好品と社会規範」

御室仁和寺・御室会館

平成24年5月26日

近代茶の湯の再生は、女学校カリキュラムへの登用から

みなさんは、茶の湯を楽しむことと社会規範（一般的なマナーや礼儀作法）がどう関係するのかと不思議に思われるかもしれないが、今日は、茶の湯の中に、日本人が伝えてきた礼儀作法が現在も生きている、ということを中心にお話したい。

茶の湯は、江戸時代から近代に至る過程で大きな役割の変更があった。近世社会において茶の湯は「遊芸」であった。茶の湯をはじめ芸能、芝居などの遊芸は、明治の近代化の中でことごとく否定されていく。明治政府は諸芸人鑑札制度を導入し、遊芸に携わる人間に対して税金をかけたのである。特に役者などはひどいもので、一等、二等、三等と等級をつけられた。彼らは見栄っ張りだから、ひとが三等だったら自分は二等、一等だとみんな一等を取ろうとする。そうなるとべらぼうな鑑札料を払わなければならない。たちまち芸人は立ちゆかなくなるのだが、それなら芸人をやめてもらって構わない。芸能なんてなくなってもいいのだから。明治政府はそういう考え方だった。

遊芸の中で生き残り作戦が成功するのは、一つは「芸術」という新しいジャンルに挑戦してうまくはまった分野である。歌舞伎や能、文楽は芸術として認められるところになり、文化財保護法の対象として今日、国家によって保護されることになる。文学の分野でも、遊芸だった俳諧は子規によって俳句という新しい芸術ジャンルを確立することに成功した。

しかし、茶の湯は文化財保護法の範疇には入っていない。いかに素晴らしい茶人が出てても人間国宝になることはないのだ。当時、ヨーロッパ的芸術の概念の枠に収まらないものは切り捨てられた。ならば近代国家に相応しい新しい意義付けをしなければならない。それに成功すれば立ち直れるのだ。

茶の湯においては、礼儀作法だった。新しい近代の婦女子がこれを学んでおけば、恥ずかしくない礼儀作法が身につけられるという意義付け。時間はかかったが、茶の湯はこれに成功する。

最初にそれをやったのは、東京の学校法人跡見学園の創設者、跡見花蹊である。大阪で寺子屋を営んでいた父の影響を受け、詩文、書画を学んだ後、父の私塾の経営を受け継ぎ、若くして京都に出てきて、京都の公家の子女の教育に携わった。明治維新により皇族・華族は東京に移ったため、彼女も東京に出て、明治8年に跡見女学校（現在の跡見学園のルーツ）を開校し、最初のカリキュラム8科目の中に茶の湯を入れる。先見の明があったのだ。

茶の湯は当時、遊芸の最たるものとしてほとんど評価されず、家元は困窮の極にあった。これは小説家・宮尾登美子の『松風の家』に詳しい。裏千家の大宗匠・鵬雲斎（1923-）のお祖父さんである圓能斎（13代。1872-1924）は、京都から東京へ出て、麻布の片隅に借家して住んでいたが、教えるにも弟子がいないので、毎日、浅草に行って今戸焼のろくろをながめていたというエピソードがある

ぐら이다。今の家元からは想像できないほど困窮していた時代に、跡見花蹊は新しい女子教育の中に茶の湯を導入した。これはすごい発想である。

当時の礼儀作法の中心は小笠原流だった。明治維新によって四民平等となり、それぞれの階級が持っていた礼儀作法が崩壊すると、新しい「国民」はいったいどの礼儀作法に準ずるべきかが大きな課題となる。それを機に、江戸幕府の公式作法であった小笠原流礼法が一気に世に広まり、東京の至るところに小笠原流礼法の稽古場ができたのである。

しかし跡見花蹊は、小笠原流礼法よりも茶の湯のほうがはるかに実用的だと見抜く。例えば、座敷に入ると、人の通るじゃまにならないようにと考えて、ちゃんと座るべき場所がわかるのが茶の湯だと言う。正座も慣れていなければ非常に不安定な姿勢だが、こういうことは茶の湯をやればすべて解消できると。

この考え方が普及し、明治の末年になると、かなりの女学校が随意科という形で茶の湯の授業を取り入れた。また、茶の湯が花嫁修業の嗜みの一つになった。これが、現在の茶の湯の一つの源流だ。

日本人が伝えてきた礼儀作法は現在、茶の湯の中に生きている

明治から大正にかけて、茶の湯を教える人は圧倒的に男性が多いのだが、習うのは女性が多くなった。茶の湯人口で女性が50%を超えるのは、昭和10年前後ではないかと思う。その後さらに女性化は進み、女性が茶の湯の中心になるのは戦後である。高度経済成長の中で電化製品の三種の神器が登場し、家事労働から解放された女性がまず取りかかったのが、お茶、お花と裁縫（洋裁）だったからである。その結果、茶の湯が礼儀作法の代表になったと言える。

これを象徴的に表すのは、塩月弥栄子さんの『冠婚葬祭入門』（昭和45年刊）という本である。これは300万部を超える大ベストセラーになり、続編も出た。裏千家14代家元、淡々斎宗匠の娘で、今の大宗匠のお姉さんだ。茶の湯の家元のお嬢さんというのが、あたかも礼儀作法の権威であるかのようなイメージを付与したのだろう。ただし、日常礼法ならばまだしも、冠婚葬祭に茶の湯の家元がどう関係するのか。

これについては、多田道太郎先生がうまく分析している。当時の日本社会は、核家族化が急激に進んでいた。3世代の世帯が少なくなり、年長者がいなくなってしきたりの知識を伝授するシステムが失われつつあった。家族内部の知識が空洞化したのに、外部では冠婚葬祭のような古いしきたりを守りたいという気持ちがまだ残っている。すると、内部と外部の接点の部分でどう振る舞ってよいかかわからない。接点のところがにわかになり、みんなが神経を集中した結果、冠婚葬祭に特化した入門書がベストセラーになったのだろう、と多田先生は言う。

本来、冠婚葬祭と茶の湯は何ら関係がない。しかし、茶人には礼儀作法の先生というイメージがあるので、冠婚葬祭も茶の湯に権威を求めたのだろう。ただし、冠婚葬祭は別として、茶の湯の中に日本の伝統的な礼儀作法に当たるものがよく残っているということはできる。茶の湯という生活文化に、今我々が失ってしまったものが集約されているし、残す機能を持っているからである。

清めと手水鉢

例えば、清めということに対して日本人は大変厳しく考えている。神社仏閣にはたいてい手水舎（ちようずや）があって、ケガレが境内に入り込まないように参拝前に手水を使う。人の死は、仏教として考えるならば不浄ではないが、仏教以前の日本人の感覚により（古事記で黄泉の国が非常に汚い世

界に描かれているのと同様) 死と血はケガレだったから、我々は子どもの頃から、葬式から帰ると、玄関に入る前に家の人に塩を撒いてもらわないと家に入れないというのが約束ごとだった。近年は簡略化されて、葬儀場で塩を渡してくれるようになったが、この頃はついに塩もなくなり、おしぼりになった。おしぼりでケガレが取れるはずがないとは思いますが、そんなふうの意味がわからなくなって、形だけが残っていく。先日キリスト教の葬式に行ったが、そこでも教会から出るときに葬儀屋さんがおしぼりをくれた。

ところが、茶の湯では手水を必ず使う。いわゆる茶道の教科書とも言える『南方録』には「亭主の初の所作に水を運び、客も初の所作に手水をつかふ」と書いてある。茶室前の低いところにつくばい(蹲踞)という手水鉢があり、この水で口をすすぎ、手をすすぐ。もちろん衛生のためではない。清めである。亭主は客の来る前に水を打ち、路地を清める。客は茶室に入る前に手水を使う。茶の湯では今でもちゃんとやっている。

結界

茶室に入るときに必ず持つのが扇である。かつて扇は、座敷に持って入ってはいけない、座敷の外へ置いていくものだった。茶の湯が始まったころ、武士が茶室に入るときは刀を茶室の外に置いていったが、扇も同じだった。

現在、扇は挨拶のときに前に置く。結界なのだ。同じ畳の上に座ってしまったが、扇から手前は格が低いのだと、空間を仕切るために扇を置く。扇によって自由に結界を作る。この扇は、決してあおいではいけない、広げてはならないものである。踊りの世界でも扇を前に置いて挨拶をすることが作法として残っている。そのほか、茶の湯では物を拝見するときにも使われている。茶碗を見たり掛け軸を見たりするときに扇を前に置いて、あたかも掛け軸や道具が貴賓であるかのように扱うのだ。

結界は、いろいろなところに設けられている。しかし、我々は結界の意味がだんだん分からなくなってきている。畳の縁(へり)も、敷居も、踏むものではないとどれほどの人が分かっているだろうか。結ばれている境目は超えるか、超えてはいけないか、どちらかであり、踏んではいけない。こういったことは茶の湯とは関係なく、本来日本人が伝統的に伝えてきた礼儀作法である。今となっては茶の湯ぐらいにしか残っていない。

回しのみ

酒やお茶のみならず、かつてはたばこも「回しのみ」がされたと聞く。私は以前「のむ」ということについて書いたことがある。酒や茶は当然だが、たばこも薬ものむという。普通、のむというのは噛まずに喉を通過させることであり、「喉」という言葉は「のむ戸」、つまり入り口のことだ。漢字で書くといろいろな「のむ」があり、要求をのむ、息をのむ、涙をのむといったさまざまな使い方があり。日本人にとって精神的なこと、気分を変えてしまうようなことに関わる行為を指すのではないかと思う。沖縄では巫女のことを「のろ」と言うし、声を出して祈ることを「祈(の)む」と言う。「のろ」による祭祀は、人間が正常でなくなる状態を指すのかもしれない。

そこまでは至らないが、似た感覚は、酒やたばこ、お茶によって得られるだろうし、そういった「のむ」行為によって、人間が普段の自分ではない気分になる、となると、一人でのむと危険だから、あるいは気分を分かち合うために、誰かと一緒にのむ、ということが回しのみを表れたのではないだろうか。

茶の湯では、薄茶は泡の立ったお茶で、一人ずつの茶碗で飲むが、濃茶は一つの茶碗に入れて回し飲みする。正月には家元で初釜という行事がある。5人一組ぐらいになって、家元の立てたお茶が回ってくる。寒い時期なので、風邪をひいている人が中には一人や二人いて、その人を經由して同じ茶碗から飲むというのは、相当勇気がいることだ。回し飲みは江戸時代からあり、江戸中期の儒学者・太宰春台が「あれだけはやめてほしい。一人ずつ別の茶碗で飲みたい」と書いているほど、昔から嫌がられたのだろうが、いまだに続いている。誰が始めたかはよく分からないが、利休の時代にはじまったことは確かだ。

これは明らかに酒のアナロジーである。酒の席で各自一人ずつ盃を持つのは新しい時代の飲み方であって、昔は巡杯（順杯）をした。中世における宴会では必ず盃が巡ってくるのだ。「荒城の月」の歌詞に「巡る盃、影さして」という部分があるが、音楽の先生は意味を全然教えてくれないので、小学生の僕には意味が分からず、大きくなるまで「巡るさ、かづき」だと思っていた。勘違いする人は世の中にはいるもので、向田邦子さんの随筆を読んでいたら、彼女も間違えていたようだ。

巡る盃とは、一つの盃が巡り、同じ盃に唇を付けるのだから、回し飲みのことである。武家の宴会では必ず最初に行われる式三献という儀式だ。今日我々の生活の中で残っているのは三三九度ぐらいしかないが、お前とオレとはもう他人ではなくなる、という契り盃である。恐らくこれが茶の湯の中に取り込まれて儀礼化していく、という流れになったのだろう。

盃のやりとりが酒の席でもほとんどなくなってしまっている現在、回し飲みが厳然と行われているのは茶の湯だけではないか。今や失われんとする作法を残している、日本の作法の殿堂であり、博物館が茶の湯である。

懐石の中にも我々が忘れてしまった礼儀作法が残る

茶の湯の中では、懐石という食事にも重要な意味を持っている。茶会と言えば、お茶を飲んでお菓子を食べて帰ると考えられるかもしれないが、そうではない。まず茶席に入ると炭手前というものがある。客が来る前に炭ぐらいついでおけばいいだろう、と思うのだが、わざわざ客が来てから釜を上げて、炭をついで、水の入った釜をかけてゆっくりとお湯を沸かす。湯が沸くまでの間に食事をする。この食事がだいたい1時間半ぐらいかかる。だから茶会は全部で4時間ぐらいかかるのだ。

茶会の懐石の中には、我々が忘れてしまった作法がたくさん存在する。例えば、僕らが子どもの頃は一膳飯は不作法であり、一口でもよいから飯は二膳食べるもの、とされた。お代わりのないように丼に高盛りにするご飯のよそい方が、死者の枕元に供える枕飯を連想させるためらしい。

また、我々ぐらい年配になると心当たりがあるだろうが、ご飯をお代わりしてもらうときには、茶碗にご飯を一口残して、そこによそってもらおうというのが約束だった。きれいに食べてからでないと失礼に感じるかもしれない。しかし、本来お代わりは、無言のうちに互いに察し合うことが必要なのだ。「お代わりします」と言うのもおかしいので、向こうから「お代わりしましょうか」と言ってくれるのを待っていなければならない。きれいに食べてしまうと、後はお茶をつぐのが約束になっている。一口残すのが「お代わりする」という意思表示なのだ。お代わりのために一口残すという作法が残っているのは、茶会の懐石だけである。

そして、ご飯を入れた飯器（お櫃）が二回廻ってくるので、二回お代わりをするのが懐石での礼儀である。三膳食べるのだ。汁も昔は必ずお代わりをした。だから汁のお代わりが、茶会の懐石では必ず出る。汁換えと言い、「汁換えをどうぞ」と言われる。二度勧められるが、二度目は断るのが約束で

ある。これもヘンなことだが、バカの三杯汁と言ひ、汁は三杯飲んではいけない。汁は二杯まで、ご飯は三膳まで、というのがかつての作法だった。

火をともにすることの重要性

親しい間柄を指す言葉に、同じ釜の飯を食うという表現があるが、これは恐らく、同じものを食べるという意味だけではなく、同じ火で煮炊きしたものを食べるという意味があったと思う。火の浄不浄ということを厳しく考えられていたのが日本の伝統だった。

先日、「火と食」をテーマとした「食の文化フォーラム」でずいぶん話題になっていたが、日本人の現代生活は、火というものから遠ざけられている。たき火もできない。IHコンロになり、炎を見ることがない。家の中にマッチもない。このように、我々がどんどん火から遠ざけられているときに、火の作法をкаろうじて教えてくれるのは茶の湯ではないかと思う。

炭手前は、火をどう整理するかということだ。下火を整理して、下火の上に美しく炭を組み立て、やがて火が炭に移っていく。そしてお香を焚いて、お湯が沸く。この面白さ、楽しさを教えてくれるのは茶の湯ぐらいだ。実際は亭主がやるのだが、客もわざわざ炉の周りに集まってみんなで見る。そんな作法は傍目にはおかしく映るかもしれないが、火の面白さ、火の楽しさをちゃんと残している。

同じ火で煮炊きしたものを食べるといったことが、茶の湯の中にかろうじて残っているのは重要なことではないかと思う。今でも東大寺の修二会（お水取り）が始まる前には、修二会を勤める練行衆と呼ばれる僧侶たちは合宿生活をやる。合宿生活のことを「試別火（ころべっか）」という。世俗の火と別にする。潔斎する。1カ月間身を慎むことによって修二会行事に参加する資格が生まれる。つまり、火を別にする、火を同じくすることが集団を作る上で重要であった。同じ釜の飯を食うということの根底にはそれがあると思う。

間合いを重視する茶の湯

同じ釜の湯を使って、茶を練って、それを回し飲みすることは、茶の湯が生み出した礼儀作法というよりも、茶の湯を芸能化するときに在来の礼儀作法を巧みに取り込んだ点であろう。その結果、今、茶の湯に参加したとき、歴史を超えてふっと心地よさを感じる。それは、実は茶の湯以前から日本人がDNAのように持っていた潔癖感や、人間と人間の間合いの感覚や、暗さ、狭さ、座り方、歩き方というもののよさを、茶の湯が今日持ちこたえているからではないかと思っている。

茶の湯で大事なものは間合いである。間については改めて言うこともないが、間を掴む、間を取ることが嗜好品の一番大きな役割ではないか。

かつて、嗜好品は人と人の間合いを狭める、間合いを詰めて濃厚な関係を持つためのものであったが、今では人と人との適切な距離を取るためのものに変わってくる。それが近代における性格の変化ではないかと思う。漱石の『三四郎』では、列車で会った先生が東京に行くところある食堂に居た。話かけようとするたびこの煙をばっと吐かれる。それをされると近づきがたくなる。たばこが個人のテリトリーを表現するための煙幕のような役割を果たしている。400年前の慶長時代にたばこの禁令が出たことがあったが、かぶき者と言われるアウトローの仲間になる儀式は、たばこの回しのみだった。禁制されたものをあえて仲間内で回しのみすることで盟約を結ぶ。禁制の有無はさまざまだろうが、嗜好品というものは人と人の強烈的な紐帯を作り上げるための道具であった。やがて、それが崩壊することになり、今や紐帯の中の礼儀作法もわずかな部分にしか残っていないのではないか、という気が

する。

先ほど、間合いというものが茶の湯では非常に大事であると述べた。茶の湯では一畳に三人座れと利休は言う。言うまでもなく、寝て一畳、座って半畳が、人間の一番リラックスできる空間である。半畳に一人、一畳に二人座れば安定した精神状態が得られるのだが、そこにあえて利休は三人入れと言うのだ。三人入れば、隣の人体温が感じられるようなある種の息苦しさ、緊張感がある。ちょうど新幹線の三人掛けの真ん中に座った人がたいへん息苦しいのと同じだ。最近気づいたのだが、両脇の席より真ん中の席だけ微妙に広い。今度乗ったら測ってみてください。真ん中に座るのは非常に息苦しいものだからそう設計されているわけだ。そういう緊張感を、あえて茶の湯は求めている。それは日常の間と違った間を、非日常の茶室の中に求めようということなのだろう。

間合いは、「時処位」という言葉で示されるとおり、三つの要素で形成される。スペースとタイミングと、最後の「位」はなかなか難しいのだが、例えば、ものすごくいい茶碗とどうでもいい茶杓を取り合わせてもうまくいかない。やはり位に合った道具を使いたい。全部同じ位の道具だと面白くないので、どこかで外したものを入れようという、外し方と合わせ方を含めた間合いのデザインのことである。これを道具組という。いくら工夫して組み立てても、分かってくれる人がいないと全く意味がない。つまり、どういう客が来るかにより道具組が決まる。亭主と客がとんちんかんだとこれもまた間の抜けた茶会になる。人と人、人との、ものとの、そういう関係性をどうデザインするかが茶の湯の面白さであり、それがまさにマナーの根本なのだ。

小笠原流礼法のコンセプトも「時処位」である。どういう時にどういうところで、どういう位の人と出会ったときにどう振る舞うかが礼儀作法だという。いつでも同じ礼儀作法では役に立たない。

尾張徳川家十九代の徳川義親侯爵は、昭和16年文部省が発表する「礼法要項」——もともと日本は戦争に突入し、礼儀作法どころではなくなり、有名無実で消えてしまったが——作法教授要項調査委員会委員長であるとともに、『日常礼法の心得』という本を書いている。その中には『時処位』を心得なければならない。礼法を本当に心得る人ならば、酒を飲んで放歌乱舞をしていても、また喧嘩しても、その中に礼儀がちゃんと備わっている。それは礼法が形だけでなく、心があるからだ。酒を飲んでみんながいい気持ちになっているところに、一人ちんと座ってしらふで居るのは不作法だ。みんなが暴れたら一緒になって暴れるのが作法である。ただしその中にも礼儀というものはちゃんとある。それを心に置いて度を超さないのが礼儀であって、いくら暴れているときでも、人の頭を踏みつけたり、人を蹴飛ばしたりするようなことがあったら、それはもはや礼ではない。いくら暴れても、心掛けのある人ならば決してそれが無作法にならない。寝そべって話していても、それが心得のある人ならば無作法に見えない。そこに礼というもののはかり知れない不思議さがある」と書いてある。名著である。

礼儀作法、社会規範を考える上では、間合いのデザインが大事な要素であるが、今の時代はそれが失われつつある。今日の人間関係に合った間合いのデザインというものを問い直さなければならないだろう。

(了)

熊倉 功夫／くまくら いさお●1943年東京生まれ。東京教育大学大学院修了。京大人文研講師、筑波大学助教授・教授、国立民族学博物館教授・林原美術館館長を経て現職。著書に

『文化としてのマナー』『日本料理の歴史』『後水尾天皇』『茶の湯の歴史』など。農林水産省「日本食文化の世界無形遺産登録に向けた検討会」の会長も務める。